

ロヒール・ファン・デル・ウェイデン (四)

ー マグダラのマリア ー

小 島 俊 明

ロヒール・ファン・デル・ウェイデン (四)

—マグダラのマリア—

小 島 俊 明

I イエスの愛弟子マグダラのマリア

ロヒール・ファン・デル・ウェイデンは、マグダラのマリアを何点も描いている。

肖像画としてではなく、祭壇画の人物像たちの一人として描いている。彼が好んだ題材であったにちがいない。画家が題材を決めるときは、注文主の意向によるか、自己表現として必要な場合であろう。ロヒールが祭壇画の中にマグダラのマリアを登場させるのは、注文によるというよりも、自らの表現に必要と考えたからではなかろうか。

ロヒールは、マグダラのマリアによって、何を表現したかったのだろうか。

マグダラのマリアとイエスについて、新約聖書にはあまり書かれていない。四福音書とも記載が曖昧で、微妙に違いが違っている。マルコだけが「マグダラのマリアは以前に七つの悪魔を出してもらった婦人である」と書いている。

英国のノン・フィクション作家ゴードン・トーマスの『イエスを愛した女』⁽¹⁾によると、新約聖書に載らなかった聖書外典にはもっと詳しい記載があるという。「聖書外典はキリスト教の大切な遺産のひとつである」。それによると、マグダラのマリアは、イエス晩年の三年間、イエスと行動をとともにした、とされている。

マグダラはガリラヤ湖西岸の町である。マリアはその地で生れ、高級娼婦をして暮らしていた。その彼女の耳に、宣教を開始したイエスの第一声が聞えた。

イエズスは「悔い改めよ。天の国は近づいた」と宣べ伝え始められた。⁽²⁾

これがイエスとの最初の出会いのきっかけだった。

「悔い改め」という言葉は、マグダラのマリアの心の琴線に触れたことだろう。悔い改めることによって、彼女は新しい人生を始めることができる。そのことを考えただけで、鳥肌が立つような興奮を覚えたはずだ。未来をさまざまに思い描くことができるほど、彼女は若かった。⁽¹⁾

マリアはイエスを追って、マグダラを出てカファルナウムの町に行き、次の言葉を耳にした。「わたしはあなたがたに、あなたがたが待ち望んでいた福音を伝える。今日、神が民になされた約束が成就した。このことを信じる者はだれも、罪から永遠に自由になる。この日を赦しの日として記憶しなさい。」

それから彼女はナインの町のシモンの家につき、イエスとシモンの公開討論をきいた。「わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためである。」

ルカによる福音書には次のように記されている――

ファリサイ派の一人が、イエズスと食事をともにしたいと申し出たので、イエズスは、そのファリサイ派の人の家に入って食卓におつきになった。さて、その町に一人の罪深い女がいて、イエズスがファリサイ派の人の家で食卓についておられることを知り、香油の入った小びんを持って来て、泣きながらイエズスのうしろから足もとに近寄り、涙でイエズスの足をぬらし、自分の髪でふき、そしてその足に接吻をし、香油を塗った。イエズスを招いたファリサイ派の

人はこれを見て、心の中で言った。「もしこの人が預言者なら、自分にさわっている女がだれか、また、どんな女であるのかわかるはずだ。あれは罪深い女なのだ」。そこでイエズスは彼に向って、「シモン、あなたに言いたいことがある」と仰せになると、シモンは「先生、おっしゃってください」と言った。イエズスは「ある金貸しから金を借りた人が二人いた。一人は五百デナリ、もう一人は五十デナリを借りていた。ところが二人とも返す金がなかったの、貸し主は二人ともゆるしてやった。この二人のうち、どちらがその人を多く愛するだろうか」と仰せになった。シモンは答えて、「多くゆるしてもらった者だと思います」と言った。イエズスは、「その判断は正しい」と仰せになった。それから、女のほうを振り向き、シモンに言われた。「この女をごらん。わたしがあなたの家に入って来ても、あなたは足を洗う水さえくれなかったが、彼女は涙でわたしの足をぬらし、自分の髪の毛でふいてくれた。あなたは、わたしに接吻をしなかったが、彼女は、わたしが入って来たときから、わたしの足に接吻をしてやまなかった。あなたはわたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女はわたしの足に香油を塗ってくれた。あなたに言う。彼女の多くの罪がゆるされたのは、彼女が多くの愛を示したことでわかる。少しだけゆるされる者は少ししか愛さない」と。そしてイエズスは女に「あなたの罪はゆるされている」と仰せになった。そこで席を同じくしていた人々は「罪をゆるすこの人は、いったい何者だろう」と心の中で言い始めた。イエズスはその女に「あなたの信仰があなたを救ったのだ。安心して行きなさい」と仰せになった。

マグダラのマリアは、この瞬間から、十二使徒に負けず劣らず、イエスに忠実に従い、主を愛する女性になった。

同じ箇所を別の福音書家はどうか伝えているか。以下、順にマタイ、マルコ、ヨハネの記述を見てみよう――

イエスがベタニアで、らい病患者シモンの家におられたとき、一人の婦人が高価な香油の入っている小びんを持って、イエズスに近寄り、食卓についておられるイエスの頭に、香油を注いだ（マタイ 26・6－8）

イエズスが、ベタニアのらい病患者シモンの家にて、食卓についておられたときのことである。一人の女が非常に高価な純粋なナルドの香油の入っている小さなつぼを持ってきて、その口を割り、イエズスの頭に香油を注いだ。するとそこにいた何人かの者が憤って「どうして香油をこんなに無駄にしたのか。これだけの香油ならば、三百デナリ以上にも売ることができ、それで貧しい人々に施しをすることができるのに」と互いに言いあった。そこでイエズスは言われた。「するままにさせておきなさい。なぜこの婦人を困らせるのか。わたしによいことをしてくれたのである。貧しい人々はいつもあなたたちといっしょにいる。あなたたちは望むときにいつでも、貧しい人々に良いことをすることができる。しかしわたしはいつもあなたといっしょにいるわけではない。この婦人はできるかぎりのことをしたのだ。埋葬にそなえて、あらかじめわたしの体に油を注いだのである。（マルコ 14－3－8）

過越しの祭りの六日前に、イエズスはベタニアに行かれた。そこには、イエズスが死者の中から生き返らせたラザロがいた。そのベタニアで、人々はイエズスを食事でもてなした。マルタは給仕をし、ラザロと一緒に食事の席についていた人々の中に加わっていた。そのとき、マリアは非常に高価な純粋のナルド香油を、一リトラ持ってきて、イエズスの足に塗り、自分の髪の毛でその足を拭いた。家は香油の香りでいっぱいになった。弟子の一人で、イエズスを裏切ることになるイスカリオラのユダは言った。「なぜこの香油を三百デナリーで売って、貧しい人々に施さなかったのか」ユダがこう言ったのは、貧しい人々のことを心にかけていたからではなく、彼は盗人であって、金入れを預かって

いながら、その中身をごまかしていたからである。イエズスは仰せになった。「この女のするままにさせておきなさい。わたしの葬りの日のために、それを取っておいたのだから。貧しい人々はいつもあなたたちと一緒にいるが、わたしはいつも一緒にいるわけではないのだ」(ヨハネ 12 1～8)

ルカは「一人の罪深い女」と書き、マタイは「一人の婦人」、マルコは「一人の女」と書き、名前を挙げていない。ヨハネだけがマルタの姉妹のマリア(ベタニアのマリア)と明記していて、マグダラのマリアとの混同がみられる。しかし、これらの記述はすべてマグダラのマリアについての記述とされている。

彼女がイエスにふりかけた香油、ナルドの香油は、インドのヒマラヤの原産植物である甘松香の根から取った非常に高価な香油である。⁽²⁾ またマルコのいう「ナルドの香油の入っている小さなつぼ」は、ギリシア語でアラバストロンといい、雪花石膏で作った香油壺である。のちに縞めのもので作った壺をも意味するようになった。

この香油壺が、絵画では、伝統的にマグダラのマリアのアトリビュートとなり、この香油壺を持った女はすべてマグダラのマリアだと見わけがつくようになった。

ヨハネによる福音書には、姦通の女がイエスによって解放される記述がある。これはフランシスコ会訳新約聖書の注によれば「ヨハネ福音書本来の記事ではなく、後の加筆とみなされる⁽²⁾」というが、感動的な記述なので、ここに引用しておきたい。

イエズスはオリーブ山に行かれた。朝早く、再び神殿の境内にお入りになった。すると、民衆がこぞってやって来たので、腰を下ろして、教え始められた。律法学者とファリサイ派の人々が、姦通の現場で捕らえられた女を連れて来て、真ん中に立たせ、イエズスに言った。「先生、この女は姦通をしているときに捕まったのです。モーゼは律法の中で、このような女は石を投げつけて殺すようにと、わたした

ちに命じています。ところで、あなたはどうか考えますか。」こう言ったのは、イエズスを試みて、訴え出る口実を得るためであった。イエズスは身をかがめて、地面に指で何かを書き始められた。しかし、彼らがしつこく問い続けるので、イエズスは身を起して仰せになった。「あなたがたのうち罪を起したことのない人が、まずこの女に石を投げなさい。」そして再び身をかがめて、地面に何か書いておられた。これを聞くと、人々は年長者から始まって、一人、また一人と去っていった。そしてイエズス一人が、真ん中にいた女と共に残られた。イエズスは身を起して尋ねられた。「婦人よ、あの人たちはどこにいるのか。だれもあなたを処罰すべきとみなさなかったのか」。彼女は「主よ、だれも」と答えた。イエズスは仰せになった。「わたしもあなたを処罰すべきとはみなさない。行きなさい。そしてこれからは、もう罪を犯してはいけない。」

さて、高級娼婦マグダラのマリアは、イエスによって、さめざめと悔い改めの涙を流し、罪けがれから解放され、精神的に蘇生し、イエスを最後まで愛するようになった。彼女はイエスの身内となったのである。身内とはどういう意味か。イエス自身の言葉がマルコによって伝えられている。

「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか。」といわれた。そして、自分の周囲にまるく座をつくって坐っている人たちに目を注ぎながら仰せになった。「見なさい、これが私の母、わたしの兄弟である。神のみ旨を行う者はだれでも、わたしの兄弟、わたしの姉妹、わたしの母である。」(マルコ 3 - 33 - 35)

身内となったマグダラのマリアは、イエスにつき従って旅をつづけた。彼女は一行とつねに行動をともした紅一点だった。弟子たちは悪魔の誘惑にさらされることがあった。イエスは悪魔と対決しなければ悪魔を克服することはできないと説いた。「そのことをわかっていたのは、弟子のなかでマグダラのマリアひとりだったろう」とゴー

ドン・トーマスは言う。「自分が来た目的を知らせるためにイエスが用いた最も驚くべき手段は、いやしの奇跡だった。弟子たちは、いやしの力はイエスの世俗的な力を示すものと受けとめた。だが奇跡とは、イエスが人に対して神のわざを行なおうとしていることの生きた証しであることに、だれよりも早く気づいていたのもマグダラのマリアだったかもしれない。」

「最初の二年間、イエスとともに巡礼路を辿ったのは弟子たちとマグダラのマリアだけだった。」三年目に入るとベタニアのマリアとマルタ、それに聖母マリアも同行するようになった。

十二人の弟子たちは、イエスを本当に理解していないところがあった。ユダはいうに及ばず、ペテロでさえもイエスを知らない、といったことは今では誰でも知っている。ところがマグダラのマリアだけはイエスが霊的な意味での王であり、イエスの勝利が霊的、精神的なものであることを理解していた。イエスによって救われたマグダラのマリアは、救いの真の意味を理解するようになっていたのである。

彼女はナルドの香油をイエスの足や頭にふりかけた。そこには象徴的な意味があったのである。ゴードン・トーマスによれば「アブラハムの孫ヤコブが、右の柱に聖油を注ぎ、それを神の祭壇として捧げた最初の人間だった」という。つまり、イエスの頭にナルドの香油を注ぐことによって、マグダラのマリアは、イエスがメシア（救世主・キリスト）であることを示そうとしたのである。

マグダラのマリアが、ただ一人の女弟子として、大変な役割をになっていたことが、これによっても理解される。

「彼女には偉大な力がみなぎっていた」とフィリポは後に回顧している。⁽¹⁾

マグダラのマリアは、ペトロやユダよりもよく「罪のあがないの意味」を理解していた。

イエスを十字架からおろすと、彼女はニコデモとヨセフに手を貸して、その遺体に「四十五キロもの投薬と香料を塗ってから、遺体を亜麻布で包んだ。それから三十六時間のあいだ、イエスの死

を悼む人たちはヨセフの家 にいた。彼らが何を話しあったかについては記録がない。マグダラのマリアも、最も深い悲しみの時、と記しただけである。」⁽¹⁾

イエスの復活の朝については、外典以外にもマタイ、マルコ、ルカ、ヨハネが記している。

のちに最初の復活祭といわれる日曜日の早朝、マグダラのマリアは独りでイエスの墓に行き、墓の入口に置いてあった石が取り除かれていることに気づいた。ラザロの墓でラザロの復活を経験していた彼女は、主の復活を信じたのではないか。ヨハネは次のように記している。

さて、マリアは墓の外に立って泣いていた。泣きながら、身をかがめて墓の中をのぞき込むと、イエズスの遺体の置かれていた場所に、白い衣をまとった二人の天使が、ひとりは頭の方に、もうひとりは足の方に座っているのが見えた。すると天使たちはマリアに「婦人よ、なぜ泣いているのですか」と言った。マリアは答えた。「だれかがわたしの主を取り去りました。どこへ置いたのか、わたしにはわかりません。」こう言って、後ろを振り向くと、そこにイエズスが立っておられるのが見えた。しかし、その人がイエズスであるとは気がつかなかった。イエズスは「婦人よ、なぜ泣いているのか。だれを捜しているのか」と尋ねられた。マリアは園の番人だと思って、「あなたが、もしあの方を運び去ったのでしたら、どこに置いたのか、教えてください。わたしがひきとります」と言った。イエズスは「マリア」と言われた。マリアは振り返って、ヘブライ語で「ラボニ」——つまり「先生」——と言った。イエズスは仰せになった。「わたしにすがりつくのはよしなさい。わたしは、まだ父のもとに上っていないのだ。わたしの兄弟たちのところに行ってください。『わたしの父であり、あなたたちの父でもある方、また、わたしの神でありあなたたちの神でもある方のもとへ、わたしは上って行く』」マグダラのマリアは弟子たちのところに行き、「わたしは主を見ました」と言い、主から言われたことを弟子たちに告げた。」（ヨハネ）⁽²⁾

マグダラのマリアがイエスの復活の最初の証人になったということは、他の弟子たちよりも、悔い改めによる救済を体験し、霊的目ざめが一番早く、主の奇跡を疑わず、素直に主に従ったからではなかろうか。

Ⅱ マグダラのマリア作品

以上に見てきたように、聖書にはマグダラのマリアについての言及が少ない。しかし古来マグダラのマリアは人々の関心を集めてきた。罪を悔い改めて、神の恵みにめぐまれた人の代表として。またそれ以上に、キリストの死に立ちあい、復活に立ちあった女性として。それほどイエスと近い関係にあったのなら、イエスの妻だったのではないか、と考える俗説があらわれるのはごく自然なことである。

それを裏づけるかのように『死海文書』がクムランの洞窟で発見された。それを読み解いて、オーストラリアの聖書学者バーバラ・スィーリングが“Jesus the man”（人間イエス）（邦訳「イエスのミステリー」）を著わした。それによれば、マグダラのマリアはイエスの妻であり、子供がいたとまで書かれている。

われわれが今注目しているのは、ヨーロッパのキリスト教宗教学画であり、マグダラのマリアを聖なる領域にあげられた人と見る信仰の視点が大事である。マグダラのマリアはすべてその視点で彫られ、描かれてきているからである。

中世では、マグダラのマリアは、絵に描かれるよりも、教会彫刻に姿を見せていた。それは大変素朴な作品であった。

テンペラやフレスコによって板や壁に描かれていたが、中世末期（の十五世紀）には、油彩の出現とともに木の板やキャンバスに描かれるようになって、多くの「マグダラ作品」が残されてきた。

1410年といえはロヒール・ファン・デル・ウェイデンが10歳のときだが、『ベリー公の時祷書』には、作者不詳の華麗な挿し絵が多く含まれていてフランスの国宝になっている。その挿し絵の一つに『キリストの埋葬』がある。（図1）

キリストの棺の手前に女性が二人描かれている。聖母マリアとマグダラのマリアである。聖母は死



図1 『埋葬』（ベリー公の時祷書）

せるわが子イエスを見上げて合掌し、マグダラのマリアは、垂れさがっているイエスの右手を取って、掌の傷痕をいたわっている。背景の中央には、ゴルゴタの丘の処刑場が描かれ、三本の十字架のうち、中央をのぞいて左右の二本には、処刑者のからだがりつけられたままになっている。十字架降下の場面である。聖母以外の十人の人物は、すべて目を伏せている。それがこの絵を肅粛とした納官図にしている。

ロヒール・ファン・デル・ウェイデンの描いたマグダラのマリアは、私の知るかぎりでは、七点も残っている。単独作品ではなく、すべて祭壇画のなかに描かれている。祭壇画を描いた画家でも、マグダラのマリアを描かなかった画家たちは多い。それを思うと、ロヒールのマグダラのマリアへの執着はきわだっているように考えられる。思うに、神秘家ロヒールは、マグダラのマリアを何点も描くことによって、彼女の裡なる深淵で起った聖変化を追求したのではなかろうか。その最後の到達点としての作が、パリのルーヴル美術館三階にある、『ブラック祭壇画』三翼の右端に収められているマグダラのマリアだと私は考えている。

それを取りあげる前に、いろいろと順序を追って「マグダラ作品」を見ていきたい。

『十字架降下』（1435）（図2）

ロヒール・ファン・デル・ウェイデンの出世作



図2 『十字架降下（部分）』ロヒール 1435

として有名な『十字架降下』については、すでに詳しく見た。今いちど、この作品の中に描かれたマグダラのマリアだけを眺めてみよう。

この作では、各人物が彫刻のように立体感をもってドラマチックに描かれているが、わけてもマグダラのマリアは、気を失って倒れた聖母マリアと並んで、上半身を折り曲げて悲歎に沈むポーズで、観る者の胸を打つ。まさしく慟哭の図である。

読書をするマグダラのマリア（1435 頃）

ロンドンのナショナル・ギャラリーにあるこの作品は、高さ1メートル、幅1.5メートル余りの祭壇画の一部分だと考えられている。他の部分は失われてしまった。

読書とは聖書を読むことで、イエスによって救われた彼女は、聖書を読むことによって霊性を高めようとしている。

左脇の床の上に、香油壺を置いているのでマグダラのマリアだとわかる。室内のディテールを描く手法は、師のロペール・カンパンゆずりであり、どこの家にもあるような部屋の一角に彼女が腰かけて、聖書を読んで精進している全身像は、悔い改めて福音の道を歩むようと、人々にすすめている図柄ともとれるのではないかな。長い髪を縫いとりのある白い頭巾で包み、聖書に視線を落とした伏目がちなその顔は、瞑想にふけっているよう

にもうけとれる。神の恵みにあずかった隠和な美しい表情の女性である。

『三連祭壇画』(1440)

ウィーンの美術史美術館にあるこの作品は、1440年頃の作とされている。

磔刑の十字架の柱に倒れかかる聖母を描いた作を中心に、右翼にヴェロニカ、左翼にマグダラのマリアを配したトリプティクである。

左翼に描かれたマグダラのマリアは、香油壺を右手で胸もとに持ち、左手で涙をぬぐいながら、立ちつくしている。黒い喪服を着て、頭の上から足もとまで、喪の布で全身をつつむようになっている。

うつむいて涙をぬぐう立ち姿のマグダラのマリアは、珍らしいのではなからうか。伏目である点が、激情をおさえ込んでいて、『十字架降下』に見られたマリアとは、大変な違いである。『十字架降下』から5年ほど後の作であるから、その5年でのロヒールの成長ぶりが窺える。感情を爆発させない、抑制のきいた手法が注目される。また青空には、目に手を当てて泣いている嘆きの天使が、黒っぽく描かれているのが目を引く。この天使は、ジョットーの描いた天使の血を引いているようにも思われるが、ロヒールがイタリアのジョットーの壁画（パトヴァにあるスクロベニ礼拝堂——1303）を見たことがあったとは思われない。彼がイタリアのローマへ巡礼にのぼったのは、先に見たように1450年であり、この作品が描かれたのは1440年頃だからである。

グリューネヴァルト作品（図3）

ファン・デル・ウェイデンの『十字架降下』の中に描かれた激情的な作品と並ぶのが、グリューネヴァルトの祭壇画に描かれたマグダラのマリアである。

この祭壇画は、ファン・デル・ウェイデンの作より80年ほど後の1515年に、ドイツのイーゼンハイムのアントニウス教団聖堂のために描かれ、現在はフランスのコルマールの美術館にある。イエスと聖母マリアと聖ヨハネとマグダラのマリアの四人が描かれた中央パネルが特に有名で、その



図3 『イーゼンハイム祭壇画（部分）』
グリューネヴァルト 1515

荒涼たる画面は一目ただけで強烈な衝撃をうける。マグダラのマリアは、聖母の傍らで、合掌した両手を高くあげて、全身を弓なりにのけぞらせている。心が凍てつくような、暗くて冷たい画面である。

この熾烈な宗教表現は、後期ゴシックの傑作の一つに挙げられている。

フラ・アンジェリコ作品（図4）

フラ・アンジェリコは僧名で、本名はフラ・ジョヴァンニ・ダ・フィエゾーレといい、ファン・デル・ウェイデンと同一年の、ドミニコ修道会の修道士だった。

誠実な聖職者だったから、その絵——主としてフレスコ画——は、瞑想的で、修道に役立つ、本来の宗教画である。

深い、敬虔な信仰に支えられ、天上的な清らかな作品を残した。フィレンツェのサン・マルコ修道院の壁画（フレスコ画）など沢山の壁画を描いた。



図4 『ノリ・メ・タンゲレ（部分）』
フラ・アンジェリコ 1438-50

フラ・アンジェリコはマグダラのマリアを『ノリ・メ・タンゲレ』（わたしに触れてはいけない）というフレスコ画の中で描いている。庭師の姿で現われた復活したイエスに思わず寄りすがろうとするマグダラのマリアを描いたものである。

罪けがれから完全に解放されて、清純な乙女そのものとなったマリアがとらえられている。（図4）その気品の高さは、マグダラのマリアの聖性をあますところなく表わしている。ファン・デル・ウェイデンの『ブラック祭壇画』の中のマグダラのマリアと双壁をなすといっていいただろう。

ピエロ・デッラ・フランチェスカ作品（図5）

ファン・デル・ウェイデンよりも10歳年下のイタリアの画家。フラ・アンジェリコのように、フレスコの壁画を沢山描いた。有名なのはアレツォの大聖堂内の壁画で、『聖十字架物語』（1452頃）の連作を描いた。ピエロの円熟期の作とされている。



図5 『聖十字架物語（部分）』

ピエロ・デラ・フランテスカ 1452

その中に、マグダラのマリアがある。よく太った若い女性が、左手に香油壺を持って立っている全身像が描かれている。長い髪が肩にふりかかっている。頭上には、聖なる光背が描かれているのが目をひく。

ピエロの女性像の特徴は、目が伏目で、内省的である点である。禁欲的だといってもいいだろう。

ティツィアーノ作品（図6）

ティツィアーノ・ヴェチェッリは、1490年に生れ1576年に没したヴェネツィア派最大の画家である。ファン・デル・ウェイデンより100年くらい後の人で、それだけにルネッサンスの人間回復の息吹をいっぱい吸っている。ジョルジョーネの弟子格の人で、フラ・アンジェリコと同じ主題を扱った『ノリ・メ・タンゲレ』（ロンドン・ナショナル・ギャラリー）という作品は、師ジョルジョーネとの共同作品とみられている。

そこには、フラ・アンジェリコ作品に見られる気品が欠け、私に触ってはいけない、と腰をくねらせた裸かのイエスのポーズは、エロティックでさえある。

彼は、祭壇画よりも近代画のように額におさまる一点の絵として、悔い改めた女を6点も描いている。作品数が多い点では、ロヒール・ファン・デル・ウェイデンに共通しているが、注文が多かったため生涯のいくつかの時期に異なるヴァージョンの作を彼自身が描いたり、工房に描かせたりした。彼自身による現存する作は2点だけとされている。

そのうちの1点。ティツィアーノ色がよく出ている油彩画『懺悔する聖マグダラのマリア』が、フィレンツェのピッティ美術館にある。1535年頃の作である。

非常に肉感的で、涙で赤くうるんだ両眼で天を見あげ、神の恵みを乞うティツィアーノ流のポーズである。16世紀の美術史家ジョルジュ・ヴァザーリが、その上半身像について次のように言っている――

髪を肩やのどや胸の上に垂らして、顔をあげ、天を仰ぐ彼女は、泣きはらした両眼で懺悔をあらわし、悔いの涙が彼女の罪を洗い流している。かくして、観る者を感動させ、欲望よりも同情の念をいっそう強く起させる。

上記のように、ヴァザーリはほめあげているが、カトリックの悔悛の秘蹟よりも、人間的な肉体賛美の気持の方が強いのでは、と思われる。

D・ローザンドは『ティツィアーノ』⁽¹²⁾のなかで、次のように述べている。

官能性を公然と示し、信心を奮い起こさせるとともに、快楽をも是認している宗教画に属している。

彼女の官能的なあこがれは、精神的な思慕の暗喩と解されねばならない。

人間性解放のルネッサンスも後期ともなれば爛熟してきて、その空気をいっぱい吸いこんでいるのだ。やはり時代背景を忘れてはならない。絵肌の官能性は、時代のしからしむところでもあったろう。近代はすぐ近くまで来ていた。あながち、俗気が勝ちすぎているとばかりは言えないかもしれない。

ティツィアーノの現存する2点のマグダラのマリア作品のうちの、もうひとつの作は、エルミタージュ美術館所蔵作品である。(図6)制作年は1565年頃とされている。研究者たちの評価によれば、この作品が最も質が高いという。左下にティツィアーノのサインがある。画家自身、この作品の出来が良いことを認め、生涯手元に置いて手放さなかったといわれている。こちらの方が、ヴァザーリの評言が当てはまりそうに思われる。官能的な体臭が立ちこめている傍らに、上を向いている精神性も感得されるのではなかろうか。ティツィアーノ最晩年の八十歳代の作品にみられるあの宗教的精神性(遺作『ピエタ』は後のレンブラントを先取りしているように思われる)をし

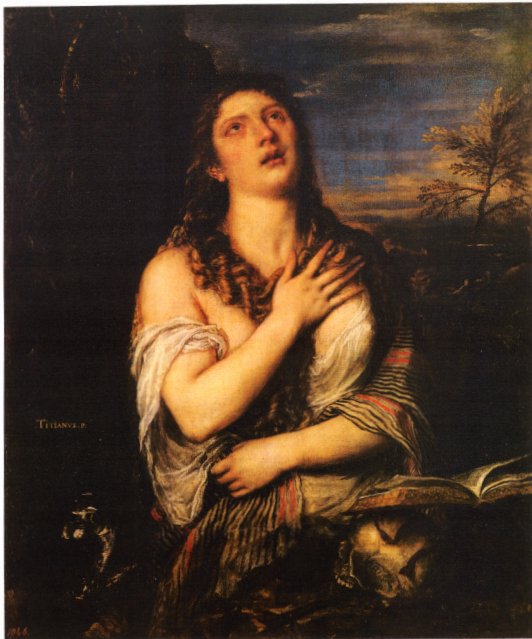


図6 『懺悔する聖マグダラのマリア』
ティツィアーノ 1565

のばせるといえないだろうか。

『ブラック祭壇画』

マグダラのマリア作品のうちでも、絵画史に残る主要な作を眺めたあとで、今一点ロヒール・ファン・デル・ウェイデンの作を眺めてみることにしよう。

それは『ブラック祭壇画』と呼ばれている三翼祭壇画 triptyque の右端の作である。

注文主がジャン・ブラックとその妻カトリヌ・ド・ブラバンであったことから、ブラック祭壇画と呼ばれているこの作品は、1452年頃に描かれたとされている。1450年の聖年に、ロヒールがブリュッセルからイタリアのローマへ巡礼したことは前に見た。その2年後の作であってみれば、イタリア絵画の影響が見られるのは当然のことである。

1450年のイタリアでは、『ビーナスの誕生』『プリマペーラ』などでイタリア・ルネサンスの幕明けを告げたあのボッティチエリは、まだ5歳にしかなくなっていなかった。ということは、初期ルネサンスの夜明け直前だったということである。フィレツェではフラ・アンジェリコやジェンティーレ・ダ・ファブリアーノが活躍していた。

美術史の硯学アルベール・シャトレは、この祭壇画のすべての人物が上半身しか描かれていないことに注目して、次のように述べている。「これは13世紀イタリアのイコンから靈感を得たもので、それよりももっとリアリスティックに描かれている。」⁽⁶⁾ また形式がキリストの両側に聖母と洗者ヨハネを配置するあのビザンティン様式のデイススを思わせる、とも言っている。デイススとは「祈り」を意味するギリシャ語だが、ビザンチン美術では、キリストを中心に、向かって左に聖母マリア、右に洗礼者ヨハネを配置する様式をさしている。そのデイス様式を継承しているが、洗礼者ヨハネが福音書家のヨハネに入れ替っている。

この三翼祭壇画が普通のと違う形式をとっているのは、注文主の家の部屋の制約をうけているからではないか。そのために、ロヒール・ファン・デル・ウェイデンはイタリアの祭壇画にみられる



図7 『ブラック祭壇画（右端）』

ロヒール 1455

プレデラを採用したのではなかろうか。プレデラというのは、何枚かのパネルに分かれている祭壇の背景をなす装飾ついでに描かれた装飾画のことである。このプレデラの影響をうけて、ロヒール・ファン・デル・ウェイデンは、三連祭壇画の背景をなす風景を比較的低い地平でひとつながりのものとして描いたのであろう。人物を背景の景

色から浮き立たせる描き方には、たいへん著しいイタリア絵画の影響を見てとれる、とシャトレは述べている。

画面の背景をなす風景は、しっかりした遠近法によって奥行き深く描かれ、三翼ともつながっているが、右端のマグダラのマリアの背景だけが、他の二画面に比べて、明るい。彼女の頭上の空は

広重の空を思わせる美しい紺碧色に輝き、地平線の彼方でひとときわ白く明るんでいる。

こういう背景の前にいるマグダラのマリアの美しさは、他の二画面を圧倒していて、右端ながらもここにこそ画家の心がいちばんこめられているように感じられる。中央に描かれたキリストとマリアと洗者ヨハネ、左端の福音書家ヨハネ、その双方の画面が暗いのに対して、マグダラのマリア画面には全体に光明が射している。この明るさは何だろう。希望に映える明るさといったらいいのだろうか。

それに、聖母マリアとくらべて、こちらのマリアの方がはるかに丁寧に描かれている。ロヒールは聖母を何点も描いているが、このブラック祭壇画の聖母は平凡な作である。マグダラのマリアの方にいちばん力がこめられている。

右の手を、脇に置いた香油壺に軽くのせ、四分の三正面という肖像画のポーズで、斜め上方を見やる両つの眼はしっかりと見開かれ、涙にくもることもなく澄みきっている。ピエロ・デ・ラ・フランチェスカの描く人物の、あの伏目がちな内省的な眼より、はるかに美しい。彼女が見つめているのは、ここには描かれていないが、まぎれもなく磔刑上のイエス、自分を罪から解放してくれた神の子イエスのいたましい姿にほかなるまい。そのイエスを、描かないで、頬つたう三粒の涙によって暗示している点がすばらしい。

右の頬に一粒、左の頬に二粒、うかぶ涙が彼女の内心を実によく表わしていて、涙の画家と呼ばれるロヒールの面目が躍如としている。涙がすべて美しいというわけではない。ウソ涙だってあるからである。しかし真実の涙の美しさを否むすべはない。

祭壇画の右端にひかえているこのマグダラのマリアが秀作である理由は、ほかにもいくつか挙げられる。イタリアで始まった遠近法のテクニックの完全マスターぶりが、背景描写にうかがえることもその一つである。それにもまして、枠の中にただ一人描く肖像画の先がけをなして、ロヒールの今一つの傑作——『若い女』の肖像につながっている。この『若い女』については、後に詳しく見附きたい。

モデルが誰であれ、このマグダラのマリアは、絵師ロヒールが創造し、産み出した女性である。その高雅な顔だち、からだに貼りつく袖なしワンピースにぴったり包まれた慎ましい胸は、粉れもなく聖性を獲得している。ティツィアーノのあの豊満な乳房を両方とも露わに見せるマリアとは対局をなす作行きである。この画面全体に漂う霊的な空気の清浄さは、そのまま絵師ロヒールの魂の清浄さである。

背中にまでとどく長い髪を束ねて、頭の上に乗っている大きな部厚いターバンか帽子かと思まがう冠の特異なフォルム、それを頭上から首もとにふんわり結わえている透明な紗のリボンの比類ない美しさ。ひき立つ細い首。冠の淡いクリーム色と香油壺の白。袖なしワンピースのブルー。濃紺のコート。袖なしワンピースから出ている左のかいながまとっている朱と金糸のピロード。何ともいえない配色の妙である。

この渾身の作が、41×34cmの枠のなかにおさまっているのである。信じられないほどの小品である。おそらく小市民ブラック個人の家の祭壇画にふさわしい小品であろう。それほど的小品であっても、マグダラのマリアの内面の神秘を追求してきたロヒールが到達した、畢生の作といえるのではなからうか。と同時に、絵画史を通して、フラ・アンジェリコの作と並ぶ最高傑作の一点であるといえよう。

ここで私は、シャトレの驚くべき指摘を紹介しなければならない。彼はこう述べているのである。

聖マグダラのマリアの冠の上に、ヘブライ文字の夢想的書体を真似て一連の文字が刻まれている。かなりはっきりとWEYDENと読める。なかば（地下聖堂に）隠された署名と見なさないわけにはいかない。⁽⁶⁾

なるほど、そう思って目を凝らしてみると、写真でも文字らしきものがぼんやり浮き出ていることがよくわかる。

私は先に、ロヒール・ファン・デル・ウエイデンは作品に制作年も署名も記さなかった、と書いた。しかし、ここに例外があったのである。隠し

サインがあったのである。

これは、何を意味するのであろうか。イタリアに行って、ロヒールは変ったのだろうか。個我に目ざめたのであろうか。マグダラのマリアの、それまで誰も描いたことのない独特な“王冠”（と私は敢て呼びたい）に、自分の名前をそっと秘め記しておくことを、彼に思いつかせたのは何だったのだろうか。

それはやはり、自分の創造したマグダラのマリア像への一途な愛によるのではなかろうか。われながら満足できる仕上がりだ、そっと自分の名を、そこに埋めこんでおきたい、という止むに止まれぬ衝動に駆られたからではなかろうか。この王冠は、ロヒールにとっては、自分の骨を納める地下納骨堂にも等しいものだったのではなかろうか。

1973年の晩秋、ルーヴル美術館の3階で、この小品に初めて接したとき、私はその聖らかな美しさに強く打たれたものである。それから30余年後の今、その美しさの謎にやっと到達できた思いである。

参考文献

- 1) ゴードン・トーマス 柴田都志子・田辺希久子訳 イエスを愛した女―聖書外典マグダラのマリア 光文社
- 2) 新約聖書・フランシスコ会聖書研究所訳所収の注
- 3) Barbara Theiring : Jesus the man. Trans world Publishers (Australia), Pty Limited. 1992 イエスのミステリー 高尾利数訳 NHK 出版 1993
- 4) Jacqueline and Maurice Guillaud : Fra Anselmo, The Light of the Soul, éd. Guillaud 1986
- 5) Millenaire de Bruxelles : Rogier van der Weyden, Musée Communal de Bruxelles. 1979
- 6) Albert Châtelet : Van der Weyden, éd. Gallimard, 1999
- 7) 岡部紘三 フランドルの祭壇画 勁草書房 1997
- 8) 木村三郎 名画を読み解くアトリビュート 淡交社 2002.
- 9) 西岡文彦 名画でみる聖書 講談社 2000
- 10) アンリ・フォシーヨン 原章二訳 ビエロ・デッラ・フランチェスカ 白水社 1997
- 11) ヴェザーリ 平川, 小谷, 田中訳 ルネッサンス画人伝 白水社 1990
- 12) D・ローザンド 久保尋二訳 ティツィアーノ 美術出版社 1988
- 13) ボリス・B・ピオトロフスキー 青柳正規他訳 エルミタージュ 岩波書店 1986
- 14) クリスチャン・エック グリュネヴァルト 新潮社 1993
- 15) NHK プラド美術館4 民衆の祈りと美 リベラ, スルバラン, ムリーリヨ
- 16) アレッサンドロ・アンジェリーニ 池上公平訳 イタリア・ルネッサンスの巨匠たち 16 東京書籍 1993
- 17) 世界美術大全集 イタリア・ルネサンス 3 小学館 1998
- 18) ドーロテ・ゼレ 水沢勉訳 絵画でたどる聖書の中の女性たち 同朋舎出版 1994